

◆ 東京都主税局長賞 ◆

「税金が活きる、この国で生きる」

千代田区立麴町中学校3年 島森 柚杏

私の父は、少し頑固なところはあるが、いつも母や私に明るく優しく寄り添ってくれる。そんな父の仕事は、救急隊員である。三日に一回二十四時間、いつ発生するか分からない怪我や病気に備えて救急隊員として働いている。夜勤明けのお昼頃に帰宅すると、疲れていてもすぐさま家事や育児に取りかかる、それが父の日常。しかし、二〇二〇年を境にその生活は大きく変化した。父は疲れた様子で帰ってくるとすぐに寝室で休むことが多くなった。話を聞くと、新型コロナウイルスの感染拡大により救急要請が増加したため、昼夜問わず現場に出場しているからだそうだ。実際の医療従事者の話に、子供ではなく一人の国民として興味が湧き、コロナ禍での仕事について詳しく聞いた。

コロナ禍では、病院は患者で溢れ病床が確保できないことから、搬送する病院が決まらず何時間にも渡って病院を探す、ということが大半だという。また、救急車の数も足りないため、緊急性の高い命の危険がある人のところへ早急に向かうことが困難だと教えてくれた。だが、コロナ流行から四年が経過し、酸素ステーションや自宅療養のおかげで、本当に必要な人のための病床を空けることができ、より懸命に仕事ができるようになったという。これは政府による早期の対応や、多くの人々の働きかけの賜物である。父と私の日常もコロナ前のように、一緒に遊んだりゆっくり過ごせたりする時間が戻ってきた。

そこで、私は疑問に思った。なぜいつでも誰でも簡単に消防などの公共サービスを利用できるのか、そもそも公共サービスとはなんだろう。そこで、詳しく簡単に情報を知ることができる、行政が運営しているサイトなどで調べてみた。公共サービスとは、「私たちの生活には欠かせず、民間の経済活動では生み出せないサービス」のことを指すそうだ。つまり、ごみの収集や処理、警察や消防、道路の管理や介護まで、私たちの毎日に必要不可欠で、便利な環境を作っているのが公共サービス。全ての国民が利用できる充実したシステムである。そしてこれを支えているのは、私たちが普段払っている税金なのである。例えば、二〇二二年時点で東京消防庁には二七五台もの救急車が配備されている。救急車は一台買うだけでも何千万もお金がかかるそうだ。その全てが、一人のお金ではなくみんなの税金で賄われていると思うと、税金の重要性が感じられる。

国が国民を守り、同時に国民が税金でみんなの安心・安全な毎日を支えている。税金が無ければ救急車を呼ぶにもお金がかかってしまい、呼べない人が出てきてもおかしくない。助かる命が助けられなくなってしまうのである。私はまだ中学生で、消費税でしか税を払うことが出来ない。それでもたった今私たちが払った税金が、少しでも誰かを笑顔にする助けになっていると思うと誇らしい気持ちになった。この気持ちを大切に、将来就労し納税したいと思う。